



夏の仲間と暮らして

この猛暑も、ちようどお盆を越えた週末は、中休み。そこに流れ込んで来た秋の空気に乗って、園庭にもトンボが飛んでくるようになりました。毎年、このトンボたちの群舞が、誠美の夏の終わりと、秋の訪れを運んでくれるのです。

しかし、そんな感慨をよそに、視線の先には、網を片手にいつもの倍の速さで駆け回る一群が。セミ捕りには少し飽きてきたこの頃、新たなターゲットの登場に、にわかに色めき立つ子どもたち。

ひと所にじっとすることの少ないトンボの捕獲は、セミよりも数段難しいと思うのですが、それでも、ひとりの子が「ほら！」と私の目の前に差し出された手には、指の間で羽が大きくひしゃげた、少し苦しそうなトンボ。

よくぞと関心しながらも、あの羽で、再び飛び立てるものなのか…いや、そもそも放してはもらえたのか…あのトンボのその後の運命が、少し気になります。

園の敷地には、私たちの想像以上に、

様々な生物が暮らしていて、そういった生物との出会いや関わりが、子どもたちの毎日を本当に豊かにしてくれます。

畑付近には、ここ数年大きなガマガエルが住みついているのをご存知ですか？毎年初夏の夕暮れ、それも園を閉める頃になると、草むらから飛び出してきて、戸締りをする職員たちを驚かせています。それ以外の時期は、一年の大半をどこかに隠れて過ごしているのですね。

ベビーカー置き場のある倉庫付近は、トカゲたちの住処になっているようで、臆病な彼らは、ちよつと人通りの少ないあの場所が都合がいいようです。

この夏は、以前ご紹介した芝のポット苗を、駐車場で育てていたのですが、実はその芝生の茂みに、そのトカゲたち数匹が住みついていたのです。いつも水遣りをするたびに、驚いて飛び出して来る…可愛い奴らでした。(子どもたちに内緒にしておいたのは…武士の情けです。)

特に夏の間は、不運にも捕獲された様々な生き物たちと、私たちは一緒に暮らすことになるのですが、それにしても、子どもたちの「捕獲したい」、「飼育した

スで話題に上がりました。

「この年齢になって、なんの躊躇もなく、虫を潰している姿があるとしたら、それを子どもらしいと言って、手放しで肯定はできないのではないか。」

との発言…もちろんその通りなのですが…私は瞬時に、以前に聞いた子どもの声を思い出していました。

「先生、あそこに蜂がいるんだ。シュウ(殺虫剤)で、やつつけて!」

園内で巣作りを始めていたならまだしも、たまたま通りかかった蜂に対しても「駆除」を求める様子は、私たち保育者を含め大人たちが、安易な殺生を繰り返す姿を見ているからなのではないか…と少なからずショックを憶えたのです。

私が、園庭の雑草を抜きながら、いつも考える事は、芝と雑草の違いは何なのか…ということ。雑草という名の草がないのと同じように、害虫という名の虫もない…徘徊する蜂は、距離をおいて見守れば、向こうから攻撃することはない…こちらがうまい対応をとってあげれば、それは害虫でなくなる…では、うまい対応って何？問われるならば、私は、

「ほどほどの共存」と答えた。

周りの豊かな自然と生命に感謝をするのなら、室内を這うアリやクモやゴキブリにだって、少しくらい軒を貸してあげてもって…思うのです。

人間と自然や生命との関わりって、綺麗事だけでは済まない、難しさがあります。こうしたジレンマに悩み続ける事が、連鎖のピラミッドの頂点に立つ者の責務なのかもしれませんね。そして、この正解のない課題に向き合い、粘り強く考え続ける力をつけることが、これからの子どもたちの学ぶ意味だと思ふのです。

例年通りなら、そろそろ、夕闇降りる園庭を、コウモリが舞い始める頃なのですが…ご存知でしたか?…これも、食事にはもってこいの場所だからかと。

園長 折井誠司

●編集 誠美保育園
●発行人 折井誠司
●印刷所 誠美保育園
●発行所 社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-12
電話 042-675-1155
ファックス 042-677-5643
E-mail: seibi@hokuen.jp
http://hokuen.jp/